パスカル、思考の宇宙

ヤマダヒフミ

この書物は余りにも深すぎるので、とても僕の手には負えないが、自分の分かる範囲だけで書いてみる事にする。

まず、パスカルの孤独と絶望という問題がある。この絶望と孤独はあまりにも深く、宇宙的なものだ。彼が十七世紀の人物にも関わらず、二十一世紀の僕達にその言葉がダイレクトに突き刺さるのは、彼の世界全体への否認と、人間に対する抽象的洞察が余りにも深いからだ。・・・たとえば、社会主義者や、各種イデオロギーを信奉する人々には、自分達の思想に未来の幸福を読み、そこに酔う事ができるが、パスカルの独断的で直接的で透明な思索は彼に、何一つ信じる事を許さなかった。だが、だからこそ、彼の思考は無限の世界を突っ切って進み、宇宙と虚無の間を反復する。その結果、彼の思考と脳髄はこの宇宙全体を包み込むほどに大きなものとなる。

にも関わらず、パスカルは最後に神を信じた。信じようとした。この問題は、日本人には非常にわかりにくい問題だ。しかし、僕はパスカルが素直に神を信じたのだ、という感じもやはりしていない。彼の知性と心情は、神の存在を信じた。・・・いや、信じようとした。信じようともがいた。だが、その一方では、彼の科学的精神も目を光らせてこちらを見ている。だから、彼は自分の余りにも鋭すぎる批評精神に対して、絶えず、神がいる事の弁護を計らなければならなかった。彼の孤独は限界をはるかに超えているので、彼の敵はいつも、キリストを信じない別の人々ではなく、自分自身の鋭い科学的批評精神だったと僕は信じて疑わない。

だから、パスカルがモンテーニュやデカルトを攻撃しているのは、パスカルが彼らと反対の位置にいるからではない。むしろ、パスカルはこの二人がおそらく、自分自身と非常に近い場所にいる事を感じていたので、自分のように神の存在を信じていない彼らを憎く思ったのだと思う。パスカルにとって、敵は常に自分自身だとすると、彼のそのまた近くの敵は、いわば、その親戚的なデカルトやモンテーニュだった。

これらは全く勝手な理解と読み解きにすぎない。だが、パスカルの孤独で偉大な精神は、人間の歴史の中でぽっかりと浮かんでいるように僕には見える。彼の姿はキェルケゴールやドストエフスキーの「地下室の手記」の主人公の姿によく似ている。彼は宇宙の中で、一人、思索している。彼はどんな革命家よりもはるかにラジカルなので、革命とか戦争とかすらが楽天的に見えたのかもしれない。彼の思索は、宇宙全体を包み込んだ。そして、今も僕達はその宇宙の中にいて、そこから一歩も出ていないといえるかもしれない。パスカルという人間には、ドストエフスキーの「罪と罰」からの次の台詞が非常によく似合うように、僕には思える。

(宿屋の女中がラスコーリニコフが日がな家でごろごろしていて、何もしていない事を責めている際の台詞)

「(前略)だけど、あんたはどうなの？だん袋みたいに寝そべってさ。何をしてるとこも見たことがない。それでもお利口さんかい？以前は子供を教えに行くって出かけたけどさ、このごろじゃ、どうして何もしないんだい？」

「おれはしてるよ・・・」ラスコーリニコフは気がすすまぬふうに、そっけなく言った。

「何をしてるのさ？」

「仕事だ・・・」

「どんな仕事？」

「考えてるんだ」